



けいせん

2011.2.3



“てんにましますわれらのちちよ ねがわくは みなをおがめさせたまえ”

今、年長組の子どもたちが覚えている『主の祈り』のはじめの一文です。

私もこの主の祈りを幼稚園の年長組の時に覚えました。私が通っていたのは、香住ヶ丘バプティスト教会付属のひかりのこ という幼稚園で、とても小さな家庭的な園でした。クラスは年少・年中・年長1クラスずつに担任の先生が一人ずつ。ですから先生は3人なのですが、牧師先生のお母様は「おほあちゃん先生」で金本うえのことなどを教えてくださり、教会員のお兄さんは「おにいちゃん先生」で、行事の時は一緒に遊んでくださり、他にも牧師先生の妹さん、校長先生（と呼んでいました）が園長先生）の奥様など、「〇〇先生」と呼ぶ方がたくさんいてくださいます。みなさん教会の方でとてもやさしく一緒に遊んでくださることを思い出します。今、恵泉幼稚園の子どもたちがうたっている言賛美歌のことなどは、やはり「ひかりひかり」など（ほとんどの言賛美歌や食前のお祈りのうたには、私も幼稚園の時にうたっていましたし、クリスマスにはページェント（聖劇）をしました。実は私は、小学校の頃のことよりも幼稚園のことをよく覚えています。したことに、思ったことに、先生の言葉… それだけ印象深く、しっかりと心に沁みこんでいるのでしょう。幼稚園の時のことを思い出すと、なんだか家庭的なあたたかさを感じるとともに、この変化の大きい時代、変わりゆく時代にあって変わらぬものの大切さと、その中にある真実なものを感ずります。キリスト教保育が大切にしているのは「いつも変わらず “あなたには愛されている存在” ということ」です。

5歳の時に覚えた主の祈り。当時、難しく意味はわからなくても、私にとってとなえるだけで安心できるものでした。うれしい時、悲しい時、不安な時… 祈ることを知っているのは大きな恵みです。何をどう祈ればよいかわからない時には、主の祈りとなえれば大丈夫。あと1ヶ月半で卒園する年長組の子どもたちも、祈りという大きな恵みと安心をもって新しい歩みをすすんでほしいと思いつつ、共に主の祈りとなえています。